

# リハビリ手芸及び障害に応じた実習用教材の工夫

A Study on Handicrafts for Rehabilitation and Devices for Teaching Materials  
in Practice Lessons for the Physically Handicapped

先川 直子

(Naoko SAKIKAWA)

## I. はじめに

平成3年4月に新設の私立の介護福祉士養成の専門学校に開設要員として名を連ねたことが、私における介護福祉士養成課程での家政学概論および家政学実習の授業とのかかわりの始まりであり、介護福祉士養成課程における家政学概論および家政学実習（被服・住居）の授業を担当するようになってから、早くも20年以上の歳月が流れた。その間、試行錯誤を繰り返しながら介護福祉士を目指す学生たちに役立つ内容のものをと心がけて授業を展開してきた。

当初は、当然のこととして、介護福祉士として巣立っていく学生達が、家事援助・生活支援の仕事上で必要な知識・技術を習得することを目的にして授業内容を組み立てていたのであるが、東京都練馬高等保育学院介護福祉科における住居の実習で、室内装飾として組紐のクリスマス・リース制作を取り入れたことが、予期せぬ方向へと私を導くことになったのである。

石原都政の下での都立の専門学校廃止の方針により、平成13年3月に、その使命を終えて閉校した練馬高等保育学院介護福祉科で家政学の授業を担当しており、閉校にあたって、それまで実施していた授業についての総括を行うために、2回に分けてアンケート調査を実施し、その結果をまとめたものを『東京都高等保育学院紀要』に2年にわたって発表した。それが、『東京都高等保育学院紀要』第20号（2000年2月）の「介護福祉科における家政学（衣生活分野）の現状とその問題点—アンケート調査結果の分析を中心に—」<sup>1)</sup>と、第21号（2001年2月）の「介護福祉科における家政学（講義・実習）の有効性について—アンケート調査結果の分析を中心に—」<sup>2)</sup>である。

練馬高等保育学院介護福祉科は、保育士の資格の既取得者用の一年制の専攻科とも言うべき学科であり、同学院ないしは他の専門学校や短大の保育科を卒業後にそのまま進学してくる学生と、保育科卒業後に保育士としてのキャリアを積んでから子育て等のために職を離れ、その後には再就職に向けて入学してくる比較的年齢の高い層とで構成されていた。

したがって、東京都からの委託生を受け入れている現在の目白大学短期大学部生活科学科介護福祉コースと学生の年齢構成としては類似している。が、前者は共学であること、およびその社会人学生の多くが幼稚園なり保育園なりで「先生」と呼ばれて仕事をしていた経験があったため、受け身で授業を受けるだけでなく、授業担当教員と一緒に自らも授業を作っていく一員であるとの思いを持って積極的に授業に参加する者が多数いた点が、生活科学科介護福祉科

ースの社会人学生とは大きく異なっている。

このような学生及び卒業生対象のアンケート調査であるため、積極的な回答が多く、感想欄には様々なことが思い思いに記入されて戻ってきたのである。

最初のアンケート調査は衣生活分野の授業に限定したもので、調査対象者は平成11年（1999年）度の在校生37名および、1期生から9期生までの卒業生で、原則として介護福祉士の資格を前提とする仕事に携わっている者に対して調査用紙を送付し、それまで実施していた授業が卒業後に就職先でどのように活用されているのかいないのかも含めて、記入してもらい回収・集計したものである。

2回目のアンケート調査は介護の現場で実際に働いている人たちを対象にしたものだが、これは調査対象者を東京都練馬高等保育学院介護福祉科の卒業生に限定せず、広く都内の介護関連施設において介護福祉士として働いている人々まで枠を広げて実施した。このアンケートの回答者の中には、偶然のことだが、私立の専門学校で私が当該科目を教えていた時の教え子たちが含まれており、感想欄に懐かしさいっぱいコメントをつけてくれた者もいた。具体的には、都内の老人ホーム・在宅ヘルパー・デイサービス・病院等で、直接介護の仕事に従事している人々を調査対象として、2000年10月～11月に調査用紙を送付して記入してもらい、回収して集計したものであり、回収数は112名であった。

すなわち、これらのアンケート調査は老人ホーム・在宅ヘルパー・デイサービス・福祉事務所などで、実際に介護の仕事に従事している中で、介護福祉士養成校における家政学が卒業後に介護の現場に出てからどの程度役に立っているのか・いないのか、あるいは現場は養成校での家政学にどのようなことをやって欲しいと期待しているのか等を明らかにする目的で実施したものであった。

したがって、介護福祉士養成校において日々行っている家政学の授業は、あくまでも介護福祉士として働く人自身の知識・技術の習得を目指したものであり、調査結果はそのような授業に対してのものだけが返ってくると思っていた。ところが、室内装飾として実施していた厚紙を用いた組紐によるクリスマス・リース制作が、その他の布を用いて「もの」を作る授業よりもはるかに高い支持を得ており、「クリスマス会にみんなで作った」（施設勤務）とか「行事（クリスマス会）には必ず出てくる項目なので」（施設勤務）等の感想も見られたのである。

実際、卒業生からは、あの板はどうすれば入手できるのかといった問い合わせが時々あり、授業で習ったままのクリスマス・リースを、他の介護福祉士にも作り方を教えながら介護福祉士同士と一緒に制作して、クリスマス会に飾っていることは承知していた。そのうちに、応用バージョンとして、細い毛糸で小さく作って、ブローチとして配ったといった報告も母校にやってきた卒業生から耳にして、有効性は確認していた。

ところが、一方で、アンケート調査の感想欄に、「お年寄りが作れる作品をもっと取り入れてほしい」（デイサービス）や、「パッチワークを教えてほしい」（デイサービス）等といったクリスマス・リース制作を前提としたと思われる記入がみられるなど、思いがけない方向での利用

がなされていたのである。

21世紀初頭の段階での高齢女性の多くは、戦後の女性の服装における和装から洋装への転換期を若い頃に身をもって経験しており、洋裁学校全盛期に裁縫の技術を習得するなどして、主婦の主要な仕事の一つとして家族のための針仕事をしてきた層でもあった。したがって現在の若者の世代に比べて、裁縫や「もの」を作ることへの愛着がとて強いため、介護福祉士養成課程で学んだ手芸が就職後にレクリエーションとして活用できたのだと思われる。

まだリハビリ手芸などという言葉もない頃であったが、卒業生からの要望に応える形で、介護福祉士のための家政学ではなく、介護関連施設の利用者のための、リハビリを兼ねたレクリエーション、あるいは単なるレクリエーションとしての手芸を授業の中に導入しようと、手探りで試みてきた。

その間に、全く別な方向からも、高齢の女性達が「もの」を作ることを熱望しているということを知ることになったのである。

目白大学の桐和祭においては、ファッションフィールドのゼミの学生を中心にクラスで参加し、もの作りの無料体験教室を実施して7年目になる。当初は近隣の子ども達への体験教室のつもりであったが、予想に反して、リピーターの高齢者の方々が楽しみに待っていてくれるようになり、毎回楽しそうに制作に励んでいるのである。中には、普段作っている自分の作品を持参する人もいて、桐和祭の期間中、無料体験教室の会場である裁縫実習室は、あたかも高齢の女性たちのもの作りの情報交換会の会場と化しているのである。

このような状態を踏まえて、最初に、そのような高齢者向けのリハビリ手芸、あるいはレクリエーションとしての活用を目指した手芸について論じ、次に、実際に現在まで授業の中で実施してきた教材について総括してみたい。

また、平成24年度に、手指にも障害を持った学生が生活科学科のファッションフィールドを主専攻として入学して実習科目の履修を希望したため、ファッションフィールドの実習科目である「衣生活実習」については、手指が不自由でも作れるように、その授業内容・教材について新しい試みを余儀なくされた。その教材の工夫についても多少まとめてみたいと思っている。

## Ⅱ. リハビリ手芸

前述のように、練馬高等保育学院の卒業生からの要望に応える形でリハビリ手芸らしきものを開始したのは、まだリハビリ手芸などという言葉もない頃であったが、介護福祉士のための家政学ではなく、介護関連施設の利用者のための、リハビリを兼ねたレクリエーション、あるいは単なるレクリエーションとしての手芸を授業の中に導入するというのは、今、振り返ってみると、介護の家政学の授業としての大きな転換点であったと思う。

市販されている『家政学実習』の教科書類のどれを見ても、家政学部の被服学の延長線上で書かれたものばかりで、〈授業を受ける者＝介護福祉士のタマゴ〉に対しての知識の習得と技術

の向上を目指すものであった。そのような中で、利用者のために使えるものを、手探りで試みてきたのである。

作業療法士の立場からのリハビリとしてのもの作りに関しては、例えば、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院の作業療法士 畠山真弓氏は、その著書『もの作りでリハビリ』の序で、以下のように書いている：

身体が不自由になられたり、日常生活で介護が必要になると、主体的な活動を行う機会が少なくなってしまう。グループで行う作業活動は上肢機能や座位耐久性向上などの身体機能の訓練としてだけではなく、認知活動の向上やコミュニケーションの広がり、そして豊かな感情を取り戻すための有効な手段となります。

・・・身近にある物を使い、大人でも楽しめる作品をコンセプトに作業療法士が自ら考え、訓練として活用してきたものの中から24の作品を抜粋しました。

本来、作業療法における作業とは作品をつくることという狭義のものではなく、人間が行う行動そのものを指します。また、リハビリテーションの目的はその人らしい活動レベルの再構築であり、失ったものを取り戻すことだけにとらわれない大きなゴールといえます。そこで、今回紹介する“ものづくり”を利用したリハビリテーションを、残された心身機能を最大限に活用して生活を楽しむ方法の一つとして、回復期や維持期の現場で実践し、活用していただけたら幸いです<sup>3)</sup>。

この文章から明らかなように、一般に、障害を持つ人の機能回復・維持のためのトレーニングは、作業療法士や理学療法士が行う業務として位置づけられているのである。そして、紙を用いた折り紙などの手工芸ともいべきものが、身体機能回復の訓練として作業療法士によって行われるリハビリの一環として取り入れられてきたが、規模の小さな病院や介護施設、あるいは住宅などでは、必ずしもそうした体制は十分に整っていないため、実際には看護師や介護職員により行われていたのが実情ではなかったかと思われる。

ここで、女性の占める割合が大きい看護師や介護福祉士がリハビリの一環としての手工芸の指導者として登場することになるのであり、利用者の側にも針を持つと自然に手が動くというような、その昔、裁縫や手芸のエキスパートだった女性たちがいたのである。その結果、折り紙などの紙を用いた作品よりも高度な、被服系の手芸の導入へと進んで行ったのではないかと推測している。

手や指先を使った作品づくりは、手指のリハビリになるだけでなく頭のトレーニングにもなり、頭や身体の花につながらると同時に、作品が出来ていく楽しみや、完成した作品を自分で使ったり周囲の人にあげて感謝されたりという喜びも加わり、さらには制作過程で仲間と楽しくおしゃべりしたり、相談しあったり、助け合ったり、工夫したりすることによって、仲間との交流が深まり、心のリハビリにもなっている<sup>4), 5)</sup>とされている。が、紙を用いた作品づく

りよりも、もっと生活に役立つ作品が多く作れる布などを用いた被服系の手芸においては、このような傾向がさらに強くなっていると言えるのではないだろうか。

このことは、世代は違うが、生活科学科の「衣生活実習」における学生たちの作品作りの様子や、居残りも苦にならない様子、あるいは自分の作品が周囲の人々に褒められ羨ましがられて、お揃いの品をプレゼントするために、空き時間や放課後に授業で習った小物をたくさん作っている時の楽しそうな様子などを見ていると明らかであるし、桐和祭の無料体験教室におけるリピーターの高齢の女性たちやカルチャーセンターなどに集う人々のもの作りに対する思いも同様であると推測できる。

また、高齢者施設におけるレクリエーションについての指導用テキストにも、次のような記述が見られるようになった：

レクリエーションも、単なる室内集団ゲームから、本来の生活再創造であるレクリエーションへと大きく変化しています。本書では、従前の単なる室内集団ゲームのメニュー集ではなく、利用者の生活を楽しく豊かにするレクリエーション、すなわち本来のレクリエーション、について、その視点や手法をコンパクトにまとめてお伝えします。

ぜひ、目の前にいる利用者の「イキイキ！ワクワク！どきどき！」を引き出し、楽しい生活づくり、豊かな生活づくりのために役立てていただければ幸いです<sup>6)</sup>。

実際に体験した例だが、数年前に施設実習に行った目白大学短期大学部生活科学科生活福祉コース（現・介護福祉コース）の学生が、実習先のお年寄りに「お手玉」がやりたいと言われて相談にやって来たことがある。その時、気に入ってもらえそうな和柄の布きれを何枚か選んで渡し、中身は数珠玉だと言われるかもしれないが小豆で大丈夫だと思いうということと、作り方と遊び方は多分覚えていると思うから、直接聞いてみて、本に書いてある方法よりもそのやり方を尊重するようにと伝えたとこ、作り方を説明してくれながら、幼い頃の話のいろいろを思い出して語ってくれ、完成品と一緒に楽しくお手玉をしたという報告があった。

このように、身体機能回復の訓練としての高齢者施設でのリハビリとしての手芸やディサービスなどにおけるレクリエーションとしての手芸の必要性が少しずつ認識されだしているのである。

一方、介護予防に代表されるように、現時点では介護を必要としない比較的元気な高齢者に対しても、さらに健康で充実した毎日を過ごせるよう、体力を維持・増進させることも重要視されるようになり、生活の中に様々なトレーニングを取り入れることが必要とされ、居住地近隣の公的施設などにおいてレクリエーションを兼ねた各種教室・講習会なども実施されるようになってきている。

そして、今日では、リハビリ手芸関連の本や作品集も数多く目にするようになり、大形手芸店では「リハビリ手芸」というジャンルも目にするようになってきている。

例えば、日本最大級の手芸・クラフト材料専門のオンラインショップである(株)クラフトマックスのホームページには、「リハビリ手芸」の項目があり、そこには「指先を動かす手芸は脳の活性化に最適！」とあり、次のように書かれている：

指先を使うことは脳の活性化につながり、老化防止につながるといわれています。中でも効果的な指の使い方は、考えながらの作業、そして創造性のある使い方です。

日本最大級の手芸専門オンラインショップ「クラフトマックス」の「リハビリ手芸キット」は、楽しみながら作る喜びと脳の活性化に役立ついろいろな手芸キットをご用意しております。

技術や慣れに合わせていろいろなキットで創作に取り組むことで、脳の活性化、老化防止にお役立てください<sup>7)</sup>。

そして、「リハビリ手芸」の具体的な内容としては、「ビーズ手芸」、「キャンバス手芸・メタリックヤーン」、「編み物」、および「その他手芸キット・材料」としてフェルト手芸やコイン手芸、手袋手芸などの手芸キットが紹介されている。が、それらのキットを見ていくと、「京都数珠屋さんに学ぶパワーストーンプレス」とか「指の体操1.2.3!」、「開運ふくろう」、「厄除けキーホルダー」、「十二支シリーズ」、「手袋で作る縁起物」などというように、明らかに高齢者をターゲットにした内容とネーミングになっていることに気づくのである。しかも、ネットショッピングが普及し、定年を迎えて年金生活者になった団塊の世代がウェブを活用する高齢者世代の出現として注目されているとは言うものの、これらの「リハビリ手芸」の内容と名称は団塊の世代には少々古めかしすぎるものであり、明らかにもう少し上の世代を対象にしており、高齢者自身がパソコンを使って購入するというよりも、高齢者関連の施設等での指導者の側が購入してくれることを狙っていると推察される。

しかし、どのような層をターゲットにしたものであるにせよ、このように、リハビリ手芸用の材料が入手しやすくなっているのは事実である。

### Ⅲ. リハビリ手芸の実習授業用教材

この章では、手探りでのスタート以来の介護福祉士養成課程における家政学実習の授業の中で、リハビリ手芸として採用してきた教材のうちの主なものについて取り上げてみたい。

#### ① 組紐のクリスマス・リース

これは、第1章でも少し触れたが、中央部分に穴を開けて周囲に切れ込みを入れただけの四角い厚紙（組紐カード）を用いて、組紐を組んでいくという簡単な技術とともに、考案者の多田牧子氏（現・京都工芸繊維大学客員教授）から伝授され、あくまでも介護福祉士になった卒業生が勤務先のクリスマス会などのイベントの時に使えるのでは、との思いで授業に取り入れ

たものである。

最も基本的な組紐の組み方をしているため、制作工程が単純であること、および厚紙の周囲の切り込みに数字を振り、数字を大から小へ、あるいは小から大へと順番に糸を移動していくことが、指先と脳のトレーニングの両方に適していたようで、卒業生たちが高齢者施設でのリハビリ手芸として採用してくれ、私がリハビリ手芸に本格的に取り組むきっかけとなった教材でもある。

当初は市販されていなかったが、多田氏が組紐の普及に尽力していたこともあり、この組紐カードの需要は多かったものと思われ、現在は材質・形状ともに改良された「組紐ディスク」として大手手芸材料メーカーのハマナカから発売されており、市中の手芸店での購入が可能になっている。

図1の左側は組紐ディスクにクリスマス・リース用の毛糸をかけた状態で、組み進んでいる組紐の状態が見える右側の写真はそのディスクを裏返したものであり、図2はベルヤリボンを付けて完成したクリスマス・リースである。

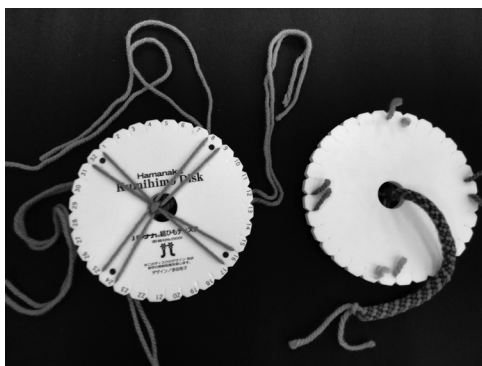


図1 組紐ディスク



図2 クリスマス・リース

## ② ボンボンクラフト

市販されている図3のようなボンボンクラフト用のプラスチックを2枚重ねて、毛糸を巻いていくことにより、簡単に毛糸のボンボンが作れる。これはあまり細かな作業がないので、広い範囲の人々を対象にすることが可能な教材といえる。図4のように形を整えて目鼻を付けたり、大小2種類のボンボンを組み合わせることでかわいい動物のマスコットとなる。生活の中への活用としては、図5のようにゴムを通したりフック付のストラップ金具やボールチェーンをつけることで、ヘアアクセサリやストラップ飾りなどの装飾小物としてとして使える。

なお、この教材はリハビリ手芸としてだけでなく、生活科学科の「衣生活実習」においても、短大入学まで毛糸玉に全く触ったことがない学生たちへの、毛糸と親しむきっかけとしても利用している。



図3 ボンボンクラフト道具

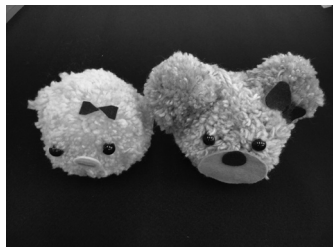


図4 毛糸のマスコット

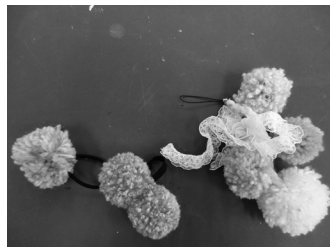


図5 ボンボンの小物

### ③ 指編み

編み針などの道具を一切使わず、自分の利き手でない方の指に糸をかけて、利き手で編んでいく方法のため、細くて先端が尖っている編み針を持たせることが心配な人も安全に制作することができる。

ただし、太い毛糸を用いても、あまり太いものには仕上がらないので、長く指編みした上で、図6のように利き手でチェーン状に引き抜くことによって太さを出す工夫も必要である。ある程度の太さにして前述のボンボンを付けるとマフラーとして使用することが出来る。



図6 指編み



図7 指編みのマフラー

### ④ 布描きクレヨンを用いたオリジナルエコバッグ

市販の無地のエコバッグに、染料として布描き用のクレヨン（図8）を用いて、図9のように好きなものを自由に描いた世界にただひとつのオリジナルエコバッグであり、授業や桐和祭の無料体験教室では、安価なことから無印良品のエコバッグを材料として用いている。ステンシル等の型染めと比べても、クレヨンは扱いが容易であり、誰にでも馴染み深い品であるため、どのような人でも抵抗なしに作品づくりを楽しめるのが、大きな利点である。ただし、熱による染料の定着が必要であり、アイロン等を使用するため、制作者の心身の状態によっては、この工程は教える側が行うなどの配慮が必要になる。無料体験教室においては安全性第一の立場から、アイロンを用いた染料の定着の部分はファッションフィールドの学生が行っている。





図8 布描きクレヨン



図9 オリジナルエコバッグ

### ⑤ フリルレースのコサージュ

ナイロン製のフリルを寄せた薄いラッセルレースが市販されており、様々な色のものが入手可能なので、それを材料として、グルグルと巻いて糸または手芸用ボンドで固定し、造花用のピンにつけたものである。造花用ピンへの接着にスーパークラフトボンドを使うなどの工夫をすれば、糸と針を一切使うことなく、ボンドだけで作ることも出来るので、制作者の心身の状態に関係なく安全に作品づくりをすることが可能である。



図10 フリルレースのコサージュ

### ⑥ ビーズのストラップ、及びビーズの小物

ビーズはクリスタル特有の輝きや質感、豊富な色や形によって、どの年齢層にも人気がある手芸材料であり、授業中の学生は勿論のこと、桐和祭の無料体験教室においても幼児から高齢者の方々まで作品を作っている姿は実に楽しそうである。

リハビリ手芸としては大型のビーズで中心部分の穴が出来る限り大きなものを探して使用し、そこに通すものも細くて扱い難いテグスではなく、マクラメ用のコードの細めのものや金色・銀色などのクラフト用ゴムを利用している。

図11はアルファベットビーズを使ったストラップと鈴である。ストラップを作る際には、自

分の名前の文字を探したり、文字同士の色の組み合わせを考えたりするため、指先を使うだけでなく、知らず知らずのうちに頭のトレーニングにもなっている。

一方、図11右側の鈴は無料体験教室に来た高齢者からもらったものをもとに作成してみた作品であるが、ビーズで五角形を作り、それをつないでボールの形状にし、その中に鈴が入っている。これはひとつ間違えるとボール状にならないため、かなり高度な頭のトレーニングとなるが、その分だけ制作者が限定されてしまうという欠点もある。

図12はビーズのブレスレット3種で、どれもビーズにゴムを通しただけで作れるものだが、右から左へと順に難易度は高くなるので、制作する人の心身の状況や指先の器用さ、手芸への関心の度合いなどに応じて対応するようにしている。



図11 ビーズのストラップと鈴



図12 ビーズのブレスレット（3種）

#### ⑦ メタリックヤーンの印鑑入れ・小銭入れ

図13のようなプラスチックのメッシュにメタリックの光沢のある太い糸を規則的に刺していくだけの手芸なので、材料を切りそろえて渡し、細かな点の指導さえきちんとすれば誰にでも容易に出来る手芸であり、簡単な割に出来上がりが美しいこともあって、リハビリ手芸の代名詞のように取り上げられることが多い。ただし、一般には、メーカーがセットで販売して



図13 メタリックヤーン

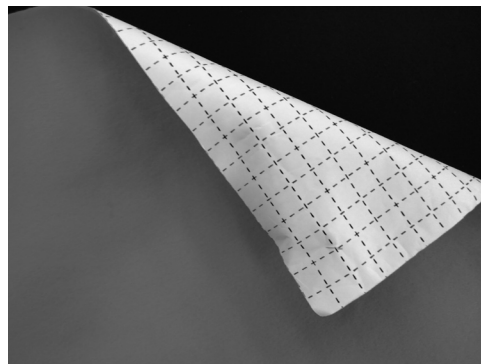


図14 シール付きフェルト

いる材料を使うためか、ティッシュケースなどの作品が中心であり、知る限りでは裏地付きのものは見られない。が、授業では裏地付きで口金式の印鑑入れか小銭入れを作成している。当初は裏地をボンドで貼っていたが、大型手芸店で図14のようなシール式の糊の付いたフェルトを見つけたことで、裏地を付ける作業は非常に楽になった。

#### Ⅳ. 障害に応じた実習用教材の工夫

前章では主に高齢者を対象としたリハビリ手芸のための実習授業用の教材について述べてきた。しかし、平成24年4月に、短期大学部生活科学科に身体に障害を持った学生が入学し、主専攻をファッションフィールドに決め、1年生用の実習科目である「衣生活実習」を履修したいとの申し出があったため、これまでは健常者対象で実施していた実習授業の内容を、手指の動きが十分でなくても自力で、あるいは介助者に時にはサポートしてもらうことによって参加出来るように工夫する必要に迫られた。リハビリ手芸の内容を取り入れることが可能なものはそれを利用して実施したが、10代の学生相手の実習授業であり、高齢者用では好み合わないものも多々あるため、障害のある学生も他の学生も両方ともに楽しく作れるものということを常に念頭に置きながらの教材の工夫であった。ただし、はさみを使って布を裁断してミシンで縫うという作業については、手指の動きが十分ではなく握力もないため、どうしても無理であり、本人が好みに合った布を選んだ後は介助者である母親が制作せざるを得なかった。

障害に応じた実習授業用教材の工夫として、リハビリ手芸以外に新たに行った中の主なものには以下のようなものがある。

##### ① 車椅子用の浴衣の着付け

着物を左前に着て平気にいる学生をなくしたいとの思いから、授業において浴衣の着付けを行っている。これは、単に着るだけでなく、着物の基本的な知識の習得と、浴衣・帯・下駄のコーディネートの学習も含めて、毎年実施していたものである。が、今年度は車椅子利用者が健常者と一緒に夏のイベントを楽しめるようにとの思いから、全くの苦痛なしにラクに浴衣と帯の姿になれる方法を教え、介助者である母親に習得してもらった。学生本人も浴衣や帯、下駄の選択には積極的に参加し、自分の好みのものが選べて満足気であった。

なお、この授業には私の担当した「生活科学概論Ⅱ」および「生活科学実習Ⅱ」を2・3年次に履修していた介護福祉士を目指す人間福祉学科の4年生が、ボランティアで参加してくれ、車椅子の乗り・降りをサポートしてくれた。

##### ② ラインストーンのココエ

履修者の各々が自分の力量に応じて作れるもので楽しいものということで、今年の授業に取り入れた教材である。実際、一般の学生の中には、極めて小さなラインストーンを用い、ピンセットを駆使して非常に繊細で複雑なデザインのものを制作した学生もいるが、手指が不自

由であっても図15の左側の作品の場合、極めて大粒のラインストーンを使用しているので、ピンセットを使うことなく、紙の上に取り分けてあるボンドを付けて、そのまま張ればよいので制作が可能であった。下方の髪留め（バレッタ）についても同様である。



図15 ラインストーンのココエ

### ③ サマヤン、及び変り毛糸のシュシュ

鉤針を用いた基本的な編み方の習得を目指して取り入れている内容であり、一般の学生には自分の好きな材質や色のサマヤンを選んで、鎖編みと細編み、長編みの技法を用いて、図16の左側のようなシュシュを制作させている。しかし、手指に障害があるために鉤針は持てないので、図17のような変り毛糸を使用して、編まなくてもボリュームが出て見栄えもするという糸の特性を利用することによって、図16の右側の作品のようなシュシュを制作することにした。作り方はリングゴムに糸を巻きつけながら一周するだけという簡単なもので、指先の動きは必要ないため、学生本人が容易に作る事が出来、最後の糸端の処理をしてやるだけで完成した。



図16 編み物のシュシュ



図17 変り毛糸

### ④ ビーズのブレスレット

前章のリハビリ手芸でも取り上げている教材だが、生活科学科の授業においてビーズ手芸を

取り入れている目的はリハビリ手芸とは全く異なっている。最大の目的は、針も摘めないようなネイルアートを施した長い爪で授業に来る学生対策であり、図18のような短大生好みの可愛いと思うようなビーズ手芸を選び、それをやりたいがために、自らの意思でビーズが摘めるように爪を切ることを狙っているのである。

しかし、指先の動きがかなり制限されている学生の場合、このような細かな作業は無理であり、前出の図12の右端の最も簡単なブレスレットの制作も不可能であった。そこで、クラフトゴムの先端部分の10cm程度をセロテープで巻いて硬くして、図19のような大型で穴の大きなビーズに通すようにしたところ、利き手だけで他方の手指での押さえがなくても通すことが出来た。この時、少しでも可愛くて素敵なブレスレットになるよう、少々高価なクリスタルビーズなどを選び、パワーストーン風のブレスレットとして、制作工程は単純でも、満足してもらえる作品になるよう心がけた。



図18 ブレスレット（一般学生用）

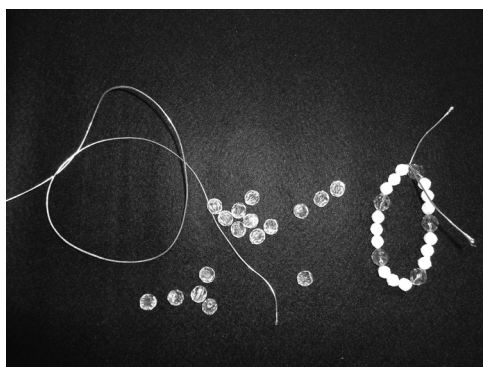


図19 ブレスレット（障害のある学生用）

## ⑤ 刺し子

晒の地に縫い進む線が印刷されている運針の練習用の教材であり、本来は直線や曲線などの幾何学的な文様構成であるが、学生が好んで針を持つような文様をということで、教材としては図20のような可愛い図柄を選び、刺繍糸で縫わせている。用途も本来は花ふきんであるが、ペーパータオルとラップ類全盛期の今日の学生たちにとって、花ふきんなどという言葉は死語に等しいので、刺し終わったものは、図21のような小型のクッションに仕立てる学生が多い。

しかし、針を持ってない学生なので、図22のような布用のマーカーを使用して、それぞれの絵に塗り絵のように彩色することにした。細かな部分の彩色ではかなり苦勞していたようだが、何とか無事に塗り終えることが出来た。作品を本人に返却してしまったため、実物映像は掲載できないが、染料定着のためのアイロンがけと布の周囲のミシンがけをサポートし、クッションの綿詰めは本人も出来るところまで自分でやり、後はサポートして彩色クッションは完成したのである。

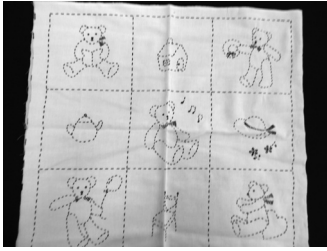


図20 刺し子 (材料)



図21 刺し子 (完成品)

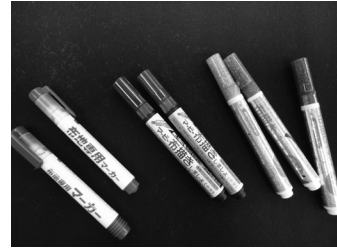


図22 布用マーカー

#### ⑥ メタリックヤーンの印鑑入れ

これはリハビリ手芸の項で取り上げた教材であるが、指先が不自由で針を持つのは無理だと推測し、メタリックヤーンをボンドで貼るだけのマスコットを教材として準備していた。ところが、プラスチックのキャンバスのメッシュの目が大きいことから、メタリックヤーンを針に通してさえやれば、針をメッシュの目の上から下に落とす方法で、他の学生と同様のものを刺していくことが出来たのである。勿論、フェルトを裏地用に切って貼り付けることと口金を取り付けることはサポートが必要であるが、自分で全部刺したという満足感はかなり大きいと感じた。

#### V. おわりに

本論文から明らかのように、手や指先を使った作品づくりは、手指の訓練になるだけでなく、構想を練ったり工夫したりすることで頭のトレーニングにもなり、頭や身体の花康につながるると同時に、制作過程で仲間と楽しくおしゃべりしたり相談しあったり助け合ったりすることによって、仲間との交流が深まって心が豊かになり、さらには、作品が出来ていく楽しみや、自分のためにとか誰かのために作るという楽しみ、完成した作品を自分で使ったり周囲の人にあげて感謝されたりという喜びも加わるため、高齢者施設における身体機能の回復の訓練の一環として、あるいは、単なる室内集団ゲームから生活を楽しく豊かにするレクリエーションへと変化してきているディサービス等におけるレクリエーションの一環として、さらには、現時点では介護を必要としない比較的花元な高齢者に対しても、健康で充実した毎日を過ごせるように体力を維持・増進させるために生活の中に様々なトレーニングを取り入れることが必要だという介護予防の視点から、簡単にできる介護予防のひとつとして、手芸の必要性が少しずつ認識されだしているのである。

その内容も、折り紙などの紙を用いた手工芸にとどまらずに、今日では、それを超えたもつと生活の中で役に立つような作品づくりとして、さまざまな糸や布などを用いた、いわゆる家政学分野で扱うような手芸も多く取り入れられるようになってきていると言えよう。

そして、現在はこの分野の手芸を含んだりハビリ手芸関連の書籍や作品集を数多く目にするようになってきている。このことは、何でも欲しいものは購入して済ませるといふ風潮のもとで、

商店街の小規模な手芸店がどんどん閉店していることと相反するようにも思えるが、オンラインショップ最大手の手芸店のホームページにおいて、数年前にリハビリ手芸の項目が新設され、他の項目に比べてだんだんと内容が充実してきていることや、大型手芸店の店内を見渡すと、若い頃に裁縫や手芸のエキスパートだった“手作り大好き”の高齢の女性たちの姿が目立つ状態なので、針を持つと自然に手が動くというような高齢者世代がいる限り、高齢者用の手芸材料はここしばらくの間は成長分野なのかも知れない。

一方、リハビリ手芸あるいは障害の程度に応じた実習用教材を準備して指導するためには、指導できるだけの知識と技術が必要なのは言うまでもないが、それ以上に、教材の選択と準備が大切であり、時間と労力をかなり必要とする部分でもある。

例えば、『ダイケアで手作りグッズを』という本では、作品づくりを支援するコツとは、あらかじめ下準備がしっかりしてあることだとして、

- 1、一人分の材料をあらかじめワンセット（ビニール袋に入れる）にしておく  
材料の配布と作業に取り掛かることがスムーズになる
- 2、お年寄りができそうなところまで、あらかじめ仕上げしておく  
全行程の何割をあらかじめ仕上げしておくか  
お年寄りが作る割合をどのくらい残しておくかが問題

という2つの準備をあげており、これらは、その時の状況（対象者の身体状況、作品作りに要する時間、参加者とスタッフの人数）によって微妙に変化するので、それらを見極めることが、作品づくりを支援するときのポイント<sup>8)</sup>であると述べている。

実際、私も研究日や週末の空いている日のほとんどは、大型手芸店の売り場での実習授業に使えるような手芸材料探しに費やしており、私の研究日は「ユザワヤの日」と学生に呼ばれている。

しかし、それだけ準備しても、障害の程度とミスマッチであった場合、有効な教材とまらないという教材の選択と準備の難しさがある。例えば、第IV章の⑤の刺し子の制作では最初に準備した布描き用のペン型染料のうちの何種類かは、握力と筆圧のない学生にとっては先端が軟らか過ぎたり、硬すぎたり、あるいは握り辛かったりして役に立たなかった。逆に、⑥のメタリックヤーンの印鑑入れ制作においては、前出のように、他の学生と同じものを作ることが可能であることが判明して、準備していた別な教材が不要になったのである。

また、準備の段階でどこまで仕上げればよいのか、あるいは完成までにどの工程でどのようなサポートをすればよいのかは、各回の教材が不自由な手指にどの程度の負担となるのかによって大きく異なるため、半期15回の授業を通して手探り状態のままであった。今回の学生の場合は介助者が付き添うことも多かったが、介助者なしで授業に臨んでいるときは、周りの学生の協力も得て授業を展開してきた。

しかし、何をどの程度ならばこなすことが可能なのかということが、まだ完全には掌握できていないので、学生の身体の状態をもっとよく観察しながら、来年度の2年生用の実習授業に

向けて、さらなる教材の開発と工夫を進めたいと考えている。

**【注】**

- 1) 先川直子・入江多津子「介護福祉科における家政学（衣生活分野）の現状とその問題点—アンケート調査結果の分析を中心に—」、『東京都高等保育学院紀要』第20号、pp.53-65、2000年2月
- 2) 先川直子・入江多津子「介護福祉科における家政学（講義・実習）の有効性について—アンケート調査結果の分析を中心に—」、『東京都高等保育学院紀要』第21号、pp.76-83、2001年2月
- 3) 畠山真弓他『もの作りでリハビリ 実践ガイド』、序文、学研、2009年
- 4) 『脳活性手芸百科』、巻頭、ブティック社、2010年
- 5) 伊藤照美『ダイケアで手作りグッズを』、序文、かもがわ出版、2005年
- 6) 妹尾弘幸『一人ひとりが輝くレクリエーションプログラム』、序文、中央法規、2007年
- 7) クラフトマックスホームページ <http://www.craftmax.net/>
- 8) 伊藤照美『前掲書』、序文